

▶花垣の八重桜  
▼松尾芭蕉の句にちなんだ  
和菓子(写真左から)  
「さまざま桜」と「花守」



## 市長の伊賀じまん

—桜、さまざま—



春といえば桜の季節ですね。桜は、つぼみが膨らみ、美しい花を咲かせ、さらには、花びらが散ったあとも葉桜となり、いろいろな形で私たちを楽しませてくれます。

伊賀の桜には、ただ美しいだけでなく、見る人それぞれの心を震わせる物語が秘められているように感じます。松尾芭蕉が詠んだ「さまざまの事おもひ出す桜哉」という句からは、主君と過ごした日々や時の移ろいなどへの思いをうかがうことができます。この句が詠まれた庭は現在も「さまざま園」と呼ばれています。

また、予野には、平安時代に一条天皇の後である上東門院彰子の命によって作られた花垣を里人が守ったという故事にちなみ、松尾芭蕉が「一里はみな花守の子孫かや」と詠んだことで有名な「花垣の八重桜」があります。この八重桜は、赤い芽出しの葉と花を同時につけることが特徴で、現在はその後継樹が地元の皆さんによって守り継がれています。

これらの句にちなんで、市内の老舗和菓子店では、「さまざま桜」や「花守」などと名付けられた和菓子が販売されており、見るだけでなく食べる桜として京のお茶人さんからも大変喜ばれているということです。

そのほかにも、伊賀の桜の名所として心念寺(上野西日南町)があります。春には大きなしだれ桜が見事に咲き誇ります。このしだれ桜は、松尾芭蕉の門弟でこのお寺の住職であった杉野配力の名前にちなんで、「配力桜」と名付けられ、親しまれています。

伊賀には由緒ある桜の木が数多くあることが私の自慢で、春になるといつも、伊賀の美しい桜をもっとたくさんの方に見ていただけるようになればなあと思っています。

また、さまざまな歴史に彩られた伊賀の桜は、伊賀が歴史の深い土地であるということの象徴でもあります。そんな桜をこれからも大切にし、地域の誇りにしていきたいと思います。

(伊賀市長 岡本 栄)

## 近世の災害と情報伝達

市史編さんだより(45)

大きな災害が発生すると、まず思い浮かぶのが親族や友人など、身近な人の安否です。東日本大震災の折には、災害情報の伝達に、テレビや新聞だけでなく、インターネットなども活用されました。今回は、江戸時代の災害時の情報伝達の様子を紹介いたします。

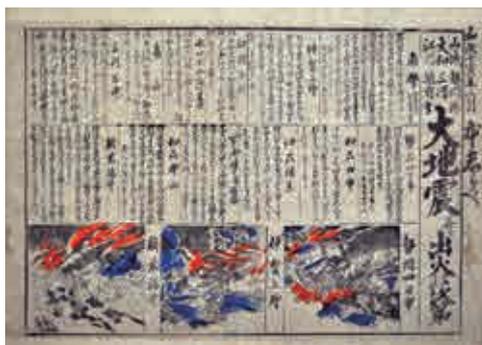
嘉永7年(1854)6月15日午前2時頃、市内北部の木津川断層を震源とする地震が発生しました。のちに安政伊賀地震と呼ばれる大地震です。市内では600人近い死者を出し、上野城の石垣が崩れ、9割近い家屋が倒壊した村もありました。

その頃、江戸に滞在していた東湯舟村の藤井忠左衛門は、大地震があったことを4日後の19日に知りまします。そして忠左衛門は、伊賀で建物被害やけが人は出ていないか、田畑の被害はどうだろうか、親族の藤井八右衛門らに宛てて手紙を出します。また、この手紙が着き次第に返事が欲しいことを記し、さらに詳しい情報を得ようとしています。

地震の情報は、中仙道の馬籠宿(岐阜県中津川市)でも、江州(滋賀県)あたりの被害が大きいことが17日に伝わっていますので、当時の災害情報は意外に早く伝達されていたことがわかります。

ところで、忠左衛門は伊賀で大地震が起きたことをどのようにして知ったのでしょうか。地震が起きた日、藤堂藩では急を知らせる使者を江戸に向けて出発させていますので、忠左衛門は藩を通じて伝えられた大地震の情報を聞いたのかもしれない。

また、江戸時代の情報伝達の方法の一つに、現在の新聞の号外のような瓦版がありました。安政伊賀地震の被害は、大和・伊勢など周辺地域の様子とともに報じられたので、忠左衛門は瓦版から伊賀で地震が起きたことを知ったのかもしれない。江戸時代の人も、災害が起きると、さまざまな方法で情報を収集し、伝達したのでしょう。



▲安政伊賀地震を報じる瓦版(探源文庫所蔵)

総務課市史編さん係  
☎ 52・4380  
FAX 52・4381